

ざしきわらし

〒028-6193

岩手県二戸市堀野字大川原毛 38 番地 2

TEL 0195 (23) 2191

FAX 0195 (23) 2834

URL <http://www.ninohe-hp.net/>

編集発行

岩手県立二戸病院 図書広報委員会



～30年前と現在、 これから30年後の二戸病院～



総看護師長 林本 郁子

平成も残り数ヶ月となりました。30年前の平成元年度は、私が6年間お世話になった福岡病院（現二戸病院）から転勤した年です。昨年度戻ってきた病院は大きく変化していましたが、お世話になった先輩方が働いておられ懐かしく頼もしく思いました。あの頃とは、建物はもちろんのこと診療科の領域数・病床数・職種の増加等々多くのことが変化していました（堀野地区も大きく変わり、以前の上司が「堀野銀座」になったと、教えてくれました）。30年前の記憶をたどると、男女共同の寮生活（トイレ・台所・電話は共同、お風呂は病院、私は4畳半一間）・1時間かけての申し送り・休憩室は畳・ナースステーションの掃除は看護師（婦）・病棟で食事毎のお茶の煮出しと配茶・ガラス注射器の洗浄・患者さんは布おむつ、入院期間は患者さんのご希望に沿った日数・・・どんどんよみがえってきます。

現在の病院は社会状況の変化に伴い、変化を社会からの要求と捉え改革と成長を繰り返してきました。今は、少子高齢化が大きな社会問題になっています。2025年問題は地域では現状のことであり、ひめぼたるネットでも二戸地域の皆さんと取り組み、ACPの考え方の浸透が世話人会のテーマとなっています。ひめぼたるネット開催の研修会へ、もっと多くの住民の方々・病院職員の参加を期待しています。患者さんのことはもちろんのこと、自分と家族の問題として考えてほしいと思います。二戸病院の職員は、急性期医療～慢性期～地域まで対応できる人材が求められています。職種の特殊性発揮以外のことであっても、二戸地域だけの問題ではないので、是非、興味をもっていただきたいです。特に、看護職は人間が生命を宿す前の段階から最期を迎え、その後の家族にもケアを提供し、人生の点と点をつないでいる職業ですので、今後、更に役割が重要になってくると思います。

30年後の自分を予想できますか？二戸病院はどうなっているでしょう。二戸地域の人口は約半分になることが予測されています。特に、65歳以下の人口割合が大きく変化すると考えられています。医療・介護・福祉にも、ITやAIの活用が進んでいくことでしょう。ACPの考え方も変化しているかもしれません。看護職は、その時々求められることにタイムリーに対応し、現状の課題に前向きに取り組んで行きたいと思っています。

インフルエンザが流行しています

～インフルエンザと抗インフルエンザ薬～

【薬剤科】

まだまだ寒い日が続いていますが、皆様いかがお過ごしでしょうか？今回はインフルエンザについての話題です。

インフルエンザは、インフルエンザウイルスにより引き起こされる呼吸器感染症であり風邪に比べて症状が重く、乳幼児や高齢者では重症化することもあります。



【質問】インフルエンザの症状は？

【回答】一般的に症状は風邪に似ていますが、風邪に比べて高熱が出やすく、のどの痛みだけでなく、関節痛や筋肉痛を伴うことがあります。ワクチンを接種している場合は症状が軽くなり、気付かないうちに周囲に感染を広げてしまう可能性もあります。潜伏期間は1～4日（平均2日）で多くの場合1週間程度で治りますが、乳幼児や高齢者、基礎疾患を持つ方の中には、肺炎を併発するなど、基礎疾患の悪化を招くこともあるため注意が必要です。

【質問】インフルエンザの治療は？

【回答】発症後48時間以内に抗ウイルス薬を使用すれば、症状が軽減され、早く治ることが期待できます。抗ウイルス薬には内服薬(タミフル、ゾフルーザ)や吸入薬(イナビル、リレンザ)、注射薬(ラピアクタ)があり、患者さんに合った薬剤が選択されます。国内で使用されている代表的な抗インフルエンザウイルス薬をご紹介します。



国内で使用されている主な抗インフルエンザウイルス薬

商品名	リレンザ	タミフル	ラピアクタ	イナビル	ゾフルーザ
一般名	ザナミビル	オセルタミビル	ペラミビル	ラニナミビル	バロキサビル
投与経路	吸入	経口	点滴	吸入	経口
用法用量	1日2回 5日間	1日2回 5日間	1回	1回	1回

お薬は用法・用量を守って正しく服用しましょう

身体拘束について ～理学療法士の立場から～

【リハビリテーション技術科】

身体拘束とは抑制帯等、患者の身体または衣服に触れる何らかの用具を使用して、一時的に当該患者の身体を拘束し、その運動を抑制する行動の制限とされています。

具体的には、1).ベットに体幹や四肢を紐等で縛る。2).ベット柵を4本で囲む。3).ベットの柵を取り外しできないように固定、または高い柵をつける。4).手指の機能を制限するミトン型の手袋をつける。5).車いすや椅子から立ち上がれないように安全ベルトやテーブルをつける。6).車いすを自走させないように車いすを固定し動かさないようにする。7).脱衣やオムツ外しを制限するために抑制衣(つなぎ服)を着せる。8).行動を落ち着かせるために、向精神薬を過剰に服用させる。転倒、徘徊予防のための離床センサーも使い方によっては身体拘束に含まれます。「身体拘束ゼロの実践に伴う課題に関する調査研究事業」報告書では一般病棟は93%、地域包括ケア病棟は98%、回復期リハビリテーション病棟は91%の確率で身体拘束が行われているようです。地域包括ケア病棟と回復期リハビリテーション病棟の確率が高いのは意外でした。

身体拘束が行われる行動・症状で多いのが、「転倒・転落」、「点滴・チューブ類の自己抜去」、「暴力・暴言」、「睡眠障害や不穏症状」、「かきむしり・自傷行為」、「脱衣・不潔行為」です。

これらの対応策として、1).「転倒・転落」にはベット柵を4本で囲む、車いすやベットに体幹や四肢を紐等で縛る、向精神薬の多剤服用。2).「点滴・チューブ類の自己抜去」にはミトン型の手袋をつける、ベットに体幹や四肢を紐等で縛る。3).「暴力・暴言」、「睡眠障害や不穏症状」には向精神薬の多剤服用。4).「かきむしり・自傷行為」ではミトン型の手袋をつける、ベットに体幹や四肢を紐等で縛る。5).「脱衣・不潔行為」にはミトン型の手袋をつける。等々が、一般的に行われています。

身体拘束が、もたらす弊害としては、1).関節拘縮、筋力低下、褥瘡の発生。2).食欲低下や心肺機能、感染症の抵抗力の低下。3).不安、怒り、屈辱、あきらめ。4).認知症状の進行。5).家族や友人の精神的苦痛。6).看護師のケアに対する誇りの低下。等々、患者自身に止まらず、家族や友人、医療スタッフに与える影響も少なくありません。

さて、当院での身体拘束についてですが、認知症状、不穏症状のある患者の「点滴・チューブ類の自己抜去」を防ぐためにミトン型の手袋をつけたり、脳の手術後では起き上がらないように体幹ベルトで固定することもあります。動ける患者は「転倒・転落」の危険が高いですが、運動機能低下を防ぐために離床センサーを使うことが多いです。離床センサーは転倒むしとマットセンサーに大別されます。転倒むし(右下写真)は文字通り、テントウムシの形をしており、患者が、ベットで起き上がった時、ベットから離れようとする時、転倒むしの頭と胴体が離れ、ナースコールにお知らせします。(テントウムシの頭と胴体が離れることについて、〇〇保護団体からのクレームは無い?) マットセンサーは患者が、立ち上がった時、床に敷いたマットを踏むとナースコールにお知らせする機器です。

最後に理学療法士の立場から言わせて頂くのであれば、マットセンサーは転倒の危険性が高い患者には不向きだと思います。ナースコールのお知らせが、あっても駆け付けた時には歩き始めています。また、転倒むしの紐を短く設定されているケースをよく見ますが、転倒を防ぐ目的であれば、ベットの高さを低くする等、転倒むしの紐を長く設定する方が、寝たきりを防ぐためには良いと思います。単に患者を縛ったり、押さえつけるのではなく、できるだけ患者の運動機能の低下を抑えられる(能力を引き出せる)、身体拘束の方法を看護師等と考

参考文献

- 1).公益社団法人全日本病院「身体拘束ゼロの実践に伴う課題に関する調査研究事業」
- 2).厚生労働省「身体拘束ゼロ作戦推進会議」



助産師のしごと

～2階病棟～

二戸病院の産婦人科では「地域周産期母子医療センター」として、二戸、久慈地域や青森県南部地域の妊婦さんや妊娠32週以降の早産児や低出生体重児を受け入れています。ここでは助産師の仕事について紹介いたします。



(1) 母児ともに安全な出産のお手伝いをします。

私たち助産師は、分娩室や手術室で、赤ちゃんの元気な産声を届けられるようにお手伝いしています。妊婦検診では、妊婦さんの健康状態やお腹の中の赤ちゃんの様子を確認し、妊婦さんに必要な栄養、運動について保健指導しています。出産だけでなく、育児もイメージができるよう、母親学級を通してお伝えしています。バースプランを導入し、できる限りご要望に添える様な出産や育児ができるようお手伝いしています。

(2) 安心して子育てができるようお手伝いをします。

出産後は母乳育児を勧めています。お産直後からお母さんと赤ちゃんが一緒に過ごし、赤ちゃんがおっぱいを飲みたいときに飲めるようサポートしています。また、お母さんの体調のこと、困っていることについて1人1人に合わせた対応を心がけています。家庭に戻られてからも育児の支援がつながるよう、二戸地域、周辺市町村の保健師と連携しています。退院後も助産外来で育児や乳房のお手入れの相談にも応じています。私たちはいつでも、お母さんや赤ちゃんが健やかに暮らしていくお手伝いをしております。

(3) 女性の一生を通じた健康支援をします。

また女性のライフサポート全般への関わりとして、思春期の女子が自分の体に興味をもち、大切にしていけるように、中・高生を対象に命の大切さや生命のつながりに関する出張教育や、更年期女性の相談を行っています。

女性のからだのこと、こころのこと、何でも相談してください。

入院患者さんへの面会制限について

インフルエンザが大流行しており、入院患者さんへの感染予防策として患者さんへの面会を制限しております。

面会者から患者さんに感染することで重症化するおそれがあること、さらには面会者ご自身が感染し、感染拡大を引き起こす可能性があるための措置ですので、ご協力をお願い申し上げます。

※ ご親戚・知人の方にも面会禁止している旨を事前に連絡されるよう併せてお願い申し上げます。



二戸病院広報「ざしきわらし」第24号（平成31年3月15日発行）

編集発行：岩手県立二戸病院 図書広報委員会

〒028-6193 岩手県二戸市堀野字大川原毛 38 番地

TEL 0195(23)2191 ・ FAX 0195(23)2834 URL <http://www.ninohe-hp.net/>